

おわりに

「障害のある子どもや保護者が安心して就学を迎えられるために、就学先や学びの場の決定手続きはどうあるとよいのか、また、就学につながる乳幼児期からの相談支援体制はどうあればよいのか」、2年間、研究チームはこのことを念頭におきながら研究を進めてきた。

障害のある子どもの就学に関する全国的な実態把握をした先行研究がない中、研究1年次は、質問紙調査によって全国的な実態把握を行った。第2章に示した結果は、いずれも貴重なものである。しかし、調査結果は実態を示してはいるが、なぜこうした実態になるのかは数字だけではわからない。結果の背景にあるものに対する問いが多数生まれた。これらの問いを解決するため、研究2年次は、10の市町教育委員会に訪問調査を実施した。それらをまとめたのが第3章である。それぞれの市町が実施している特色ある取組は、単にシステムとして優れているだけではなかった。システムの背景に、障害の有無に関わらず一人一人の子どもやその保護者が安心して妊娠中から乳幼児期をすごして、就学を迎えて欲しいという担当者の思いがあった。訪問した研究分担者はシステムだけではなく担当者の強い思いをしっかりと受けとめながらまとめを作成した。

研究協力機関である札幌市と松江市には、研究1年次から訪問させていただき先駆的な取組について情報収集することができた。また、行政担当者のみならず、保育・教育現場で日々子どもや保護者とのかかわっている方々から直接話をうかがうことができた。ここでも、システムとしての形だけではなく、子どもや保護者への思いを知ることができた。また、思いを形にしてこられた方々の努力を想像した。

研究協力者からは、長年にわたり保育や教育の現場で子どもや保護者と丁寧にかかわってこられた経験から示唆に富むお話をうかがうことができた。考察の作成に当たり必要でかつ重要な知見を多数いただくことができた。

本研究をまとめるにあたり、質問紙調査と訪問調査に御協力いただいた市区町村教育委員会並びに調査の実施に御理解と御協力をいただいた都道府県教育委員会の皆様に改めて感謝申し上げます。また、研究協力者の菅野和彦氏、北本雅人氏、糊澤美奈登氏、高橋志織氏、堀之内恵司氏、真鍋健氏、森重亜美氏、研究協力機関の松井泰子氏、山本勉氏、本間真純氏に感謝申し上げます。さらに、令和4年度1年間初めての地で、慣れない研究の研究分担者となって、研究所の職員に、日々前向きな姿を見せ続けてくれた特別研究員の杉山奈実子さんに心から敬意と感謝を表します。

本研究成果報告書が就学を迎える子どもと保護者の安心のために活用されることを願っています。

研究代表者

インクルーシブ教育システム推進センター 上席総括研究員 久保山 茂樹

